
たましい系学院（園?）物語

別天地のウルフクイーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たましい系学院（園？）物語

【Nコード】

N6604Y

【作者名】

別天地のウルフクイーン

【あらすじ】

麗らかな昼休みのこと???

つつみこと

生徒会室に呼び出された堤美琴は超美形モテ人気生徒会長に

「君の運動神経にかけて頼みがある」

といわれ、紅の京の冒険者ギルド魂狩り部隊という妙な部隊に入り、

学院（学園？）内に落ちた魂を拾う”魂狩り”という奇妙な任務を遂行するために、

持ち前の抜群の運動神経と五感で大奮闘します。

学園ものを書こうとしても結局ファンタジーになってしまう……
(クセです)

チートと書いてありますが、
たいしたことないです。苦手な方でも大丈夫なレベルです。
暇つぶしにでもどうぞ。

ちなみに、一話あたりの文字数は3000文字くらい
サクッと読むのにおすすめです。

面白かったら、感想どしどしとお願いします^^

No. 001 快活なる学園生活は新たなるデキゴトの鍵であった（前書き）

2012年1月6日の夕方（17時あたり）に、
少し文章を見直して訂正しました。

ついでに本日、No. 002を訂正、No. 003を更新します。
（多分）

「訂正してる暇があったらさっさと更新せい！」
す、すみません。でも、変だと直したくなるんです、ごめんなさいっ。

レビュー感想、ちょこつとささつと入力お願いします。助かります（笑）

No. 001 快活なる学園生活は新たなるデキゴトの鍵であった

No. 001 快活なる学園生活は新たなる出来事の鍵であった

——短絡的に言えば、それがきっかけだったとも言えるだろう…
…か？

自信はないけど、とりあえず話す。



それは、麗かな昼休みのこと。

私は、仲のいい数人の友達と机を合わせて、お弁当をつついている最中であつた。

「堤美琴さんいますか」

教室の前の扉が開く音が耳に入る。次いで私の名前が、昼休みの騒がしい教室に通る声で響き渡つた。

私は自分の名前が呼ばれた条件反射で、教室の扉を振り返る。
そこには、ボブカットの上級生が顔をのぞかせていた。彼女がかなりよく通る声の主だろうか。

「あ…：はい、私ですけど」

私はお弁当に蓋をかぶせてそちらへ向かう。

制服の襟元についたバッジの色から、三年生とわかつた。

三年生が、私に用事？　もしかして、取り次ぎ？　でも、わざわざ私が頼まれる理由がない。

「生徒会長から呼び出しですって」
三年生はそう言った。

「生徒会長？ 呼び出し？」

心当たりなし。何それ。

「生徒会長の三城みしろさんね。今すぐ来てほしいんだって」

え、何か、私、悪いことでもしたっけ？
生徒会長っていう響きが、そう感じちゃう。

私は三年生に「今すぐ行きます」と返事をして、お弁当を軽く片づけると、小走りで生徒会長室へと向かう。



”生徒会室”。

扉の横の札にはそう書いてあった。やはり学生というものの、こういう文字を見るとわずかにドキッとするものだ。

何か本当に特別な用や呼び出しがない限りあまり来ない、いや来たくない部屋だ。

生徒会長の三城みしろ綾りょう……先輩（一応生徒会長で先輩なので、いくら心の中で紹介するとはいえ敬称をつけないと落ち着かないのである）。

入学したときの自己紹介で、壇上に出てきたとき？？たぶん、新入生全員がまったく同じことを思ったんじゃないかな。

それはきつとこんな一言で言い表せるはず。

「美形過ぎる！」。

もう少し細かく言えば、美形過ぎて、カッコよすぎて、女子のファンが軽く三百人以上いるし。

それに先生からの信頼も厚く、人望もあれば、学園の中心人物。

??で、そんなスーパースタudent会長が、一体私なんかは何の用なの？

気を取り直して、私はドアノブに利き手の左手をかける。……かけて、あわてて左手でぎこちないノックをする。

あと一歩遅かったら危なかったよ。

……………

返答はない。聞こえなかったかな？　もう少しハデにやったほうがいいかな。

といっても、そんな思い切り叩いていいのか？　神聖な生徒会室を。

もしこのまま応答なしだったらどうするかな。

私はふーっと肩の力を抜く。

さてどうするか。

???と思ったとき、私は不意に後ろの壁を失い、後ろへ大きく倒れてたたらを踏んだ。

小学校の運動会の徒競走では一位以外獲ったことがない自慢の運動神経で何とか体勢を立て直したものの、かなりまぬけだった。

つまり??。

生徒会室の扉は内開きだった。

扉が突然開き（というかノックをしたのだから開くのは当たり前かもしれないが）、私は扉によりかかっていたため前のめりに倒れた……のだ。

私は体を起こす。

……、わ。

な、何なの、この超美人……。

ドアを開けたのは生徒会長ではなかった。

ふわっふわのロングヘアを下ろした――

見た目からして確実に三年生だ。それに襟元のバッジは、後から確認すると三年生のものだった

――超絶美人だった。

「副会長の三枝夕深です。堤美琴さんですよね？ どうぞ中へ」

三枝夕深やいばゆみと名乗った超絶的な美貌を持つ三年生は深々と腰を折ると、ドアを広く開けてくれた。



奥の机。入学生歓迎会の際に見た超美形の男子生徒が腰掛けて

こちらを見ていた。

「堤美琴君かな」

低い声。思いがけず裏返った声で答える。

「は、はい」

「君に頼みがあるんだ」
低い声で続けた。

た……頼み？

No. 001 快活なる学園生活は新たなデキゴトの鍵であった（後書き）

ども。

どうでした？

どしどし感想お願いします。

あと、縦書きで読むときに前・後書きが邪魔だったらぜひ言ってください。

誤字脱字もお願いします。

N o . 0 0 2 生徒会長が私に何か用があるらしいです（前書き）

今回はちょっと短めです。……って思ってたんだけど、意外に長くなってしまった。

悪いことではないのでいいんですが。

なんて思ってたらしばらく編集するうちに大幅カットで一気に短くなった！

ちよつと悲しい……

追記

1月6日（金）に修正加筆しました。雰囲気agaraと変わった……と思います

呼んで下さった方はレビュー感想、是非お願いします！

No. 002 生徒会長が私に何か用があるらしいです

No. 002 超美形モテ人気生徒会長が私に何か用があるらしいです

「頼みがあるんだ」

頼み……？

あまりミーハーじゃなくて美形アイドルグループ云々に興味のない私でも、誰が見ても超美形の生徒会長に見つめられて思わず頬が熱くなる。

会長はさらに続ける。

「君の、そのずば抜けた運動神経にかけて、だ」

ずば抜けた運動神経にかけて？

……生徒会長が私のこと知ってるなんて。あ、何かすごい嬉しい。ていうか、会長みたいな超美形な人にずば抜けた運動神経とかって言われると、超嬉しいんだけど。

「今年の体力測定の結果を見て選ばせてもらうつもりだったのだが、選ぶ必要もなかった。かなり有名だったからな」

ええ？ 私、そんなに有名なわけ。

選ばせてもらうって、私は一体何に選ばれたっていうの？
「ぜひ協力してほしい。魂狩りに」

「た……魂狩りい？」

思わず素っ頓狂な声が出る。

ていうか、私、さっきから語尾に疑問符しかついてないし。

「魂狩り？？っていうのは、簡単に言えばこぼれ落ちた魂を拾う仕事だ。簡単に言えば、だがな」

こぼれ落ちた魂を……ひ、拾う？　もう、さっきから突拍子もない発言ばかりで、頭が痛い……。

「まあ、とりあえず座ってくれ。ああ、俺は目を合わすのがあまり好きじゃないから、俺の隣へ来てくれないか？」

え。ちょ、ちよつと、ドキドキするよ。私って、ほんとにこういうのに弱い……。

私はあまりの緊張に少々震え気味で、生徒会長の隣に腰掛ける。

腰掛けたソファは革張りで、一見がっちり硬そうに見えたのに思いのほか柔らかく、ふかっと腰が沈み込む。

わずかに緊張がほぐれて、とりあえず訊ねる。

「魂狩りって、それ、一体、どういうことなの、……あ、じゃなくて——魂狩りって、どういうことなんですか？」

やば、忘れてた。

生徒会長は三年生で先輩だし、しかも超美形モテ人気生徒会長なんだった。タメ口なんて、だめだよ、自分。

「ああ、言い忘れていたが、俺に対しては敬語を使わなくていい。それに、さっきから俺のことを生徒会長と呼んでいるが、長くて面

倒だろうから三城でいいよ」

そっ、そんな。さすがに、一応先輩なんだし生徒会長だし、タメ口&名字呼び捨てはN・Gでしょ。

「じゃあ、三城先輩でいい。短いだろ、そのほうが。俺も、堅苦し
いな」

み、三城先輩、で、いいの……かな？

「しかし、そちらが呼び方を変えたなら、こちらを変えとするか
え？

「え、じゃない。それくらいでビビるな。これからやっていけねー
ぞ」

は、はい。これからって、何なのか、まだよくわからないんです
けど……て、敬語じゃなくていいのか。

「魂狩りだよ。……まあいい。とりあえず、これから、俺はお前を、
そうだな……あだ名を考えるのも面倒だし、美琴でいいか？」

みつ、みこ……と？

……超美形モテ人気生徒会長から下の名前で呼ばれるのが、まさ
かこんなに嬉しいとはね。

恐るべし。

「ほ、ほんとにいいんで……じゃなくて、いいの？」

実際タメ口で言ってみると、本当にタメ口でいいのかと疑わしい。

「まあな」

そういえばいつの間にか、どちらかというところ「君きみ、ちょっとこっちへ来てくれないかい」的な雰囲気醸し出していた生徒かいちよ……もとい三城先輩が、だんだんラフな雰囲気になってきてる……!?

「そうか? ていうか、俺、そんなに堅物だったっけな」
堅物でした、正直……ん?

そこまで言って、私はあることに気づいた。

それはとんでもないことだった。

No. 002 生徒会長が私に何か用があるらしいです（後書き）

ふぁー！ 疲れたっ。余談ですが（というかこのあとこのお話に登場するかもしれませんが）私はチート好きです。（余談すぎますね）

N o . 0 0 3 神様がお亡くなりになったらしいです（前書き）

今回のサブタイトルは考えるのが割と難しかったかも。
今回で大きく物語が進展します。

面白かったらレビューお願いします！

No. 003 神様がお亡くなりになったらしいです

No. 003 神様がお亡くなりになったそうです

先輩、もしかして……。

「三城先輩？ もしかして……さっきから、私の心、呼んでません……よねえ？」

自分から言いながら、半信半疑で訊ねる。

「ちっ、バレたか」

そう言って、三城先輩は薄く笑う。

だってさっきから、私が心の中で思ったことに、すべてレスポンスが返ってくるんだもの。

「そうか。うっかりしてたな」

うっかりって……うっかりすぎるでしょ。

「でも……何で、心なんて読めるの？ もしかして、超能力者だったり」

「近い。近いけど違う。だがかなり近い」

わ。超能力者系超美形モテ人気生徒会長なんて、かっこよすぎるでしょ。ラノベに、出てきそう。

「長くなるけど、俺の話をしようか？」

「ぜひ頼みます」

私在意気込んで言うと、先輩が遠い目をして話しだす。

「とりあえず、俺の昔の話をする。俺は昔から、父親に鍛えられてたんだ」

「あ、それ、私と同じ……」

思わず、隣の先輩のほうへ身を乗り出す。

「そうなのか？」

私は先輩に聞かれ、うなづく。

「私は、昔、父親に格闘技を何種類か教えてもらってたの。今は、父親はヨーロッパに単身赴任中で、しばらく会っていないんだけどね」
思わず、あの修行の日々を思い出して、なぜだか涙がこぼれる。
血の滲むような修行……でも、楽しかった。注意されたことを直していくと、どんどん上達していった、でも、未だにお父さんだけには勝てない。勝ったことがない。

「私の運動神経と動体視力がここまですくなくなったのも、父親がここまで鍛えてくれたからで……？？って、あ、ごめん！　今、先輩の話の最中だった……」

「いや、別に大丈夫さ」

「今度は先輩の話を聞かせてよ」

「ああ？？とりあえず俺は、母親がイギリス人で、父親は日本人のハーフなんだ」

「へえ……ハーフって、かっこいいね」

よく見ると、先輩の瞳はきれいな翡翠色をしていた。イギリス人の瞳って翡翠色だったっけか？

その翡翠色の瞳が、陰る。

「……俺は、ハーフって言葉、あんま好きじゃねえんだよな」

「どうして？」

不思議。ハーフって、何かかっこいいイメージがあるんだけど。

「ハーフって、半分って意味にもなるからさ。半人前って言われてるみたいで、嫌なんだ」

……。

「半人前、かあ」

私がつぶやいた、そのときだった。

「業務連絡。奴らが来ているらしい。今百個ほどの魂がこの学院の中に落ちている。動ける隊員は、学院内で生徒に変化して潜んでいる奴らに注意しながら、魂の回収に協力してくれ。もう一度繰り返し……」

奴ら？　魂？　回収？

「お……お前、聞こえたのか、今のテレパシーが」

「え？ 聞こえたよ。百個の魂が落ちてるから、回収してくれとか」
そこまで言って、何かまずいことを言ったかなと心配になった。

先輩の目の見開き加減がすごすぎるからである。

「……美琴……お前、能力者か？」

「は？」

思わず素っ頓狂な声がもれる。

「……な、訳がないよな。美琴って確か格闘技やってたんだっけな？？もしかして剣道もやってるか？」

「ん……一応ね」

メインじゃないけど。

「だからか」

な、何。何の話？

「いや、何でもない。それより、美琴に頼みがある」

え？ いや、私が呼び出された理由、それだし。

「魂狩りに協力してほしい。魂狩りって言うのは、詳しく説明するとだな」

私が魂狩りの説明を促そうとするより前に、先輩は口を開く。あ、心が読めるのか。

「実は、祖母は人間界出身なんだが、祖父は異世界？？あかみやこ紅き京のレミナリ・スズリ・フライト・エジュリ・シミラット王国？？愛称はレミナリ王国で？？の出身なんだ」

……え！？ ん……ややこしいぞ。異世界出身の祖父と人間界出身の祖母の間に……父方だから、えっとお父さんが生まれて、さらにお父さんがイギリス人のお母さんと結婚して生まれたのが、先輩ってことは、つまり先輩は日本人とイギリス人プラス異世界人の血が混じってるんだ。……すげーな。

「祖父は、昔から冒険者ギルドの魂狩り部隊に属していて、俺も運動神経に自信があったから、たまに狩りに協力したりしてたんだけど、部隊に入っていない、しかも子供が、魂狩りをするのはだめだ

と言われて、俺は冒険者ギルドの魂狩り部隊に入ったんだ」

ふうーん。冒険者ギルドって、何かRPGみたい。

「で、俺は何度も魂狩りを経験して、自分で言うのも何だが、かなりの腕前になって、ランクSSレベルになったんだ」

……えすえすが、どれくらいすごいのかはわからないんだけど、まあすごいんだろうな。

えすえすのさらに上って、あるの？

「トリプルSもあるし、プロフェッショナルもあって、一番上が天才だよ」

……いたって単純なネーミングだ。

「……説明はこれくらいか」

「ちょ……ちょっと待ってよ。まだ魂狩りの説明、してないんだけど」

どう狩るのかとか。そもそも、何で魂なんかがこんな学校にごろごろ落ちるのか。

「ああ……えっとな、魂狩りっていうのは……実は、空と宇宙の間には、大半の人間は気づいていないが、天界と異世界への扉がごとく存在しているんだ。ちなみに、この世界には、人間界のほかには異界、天界、妖界、鬼界、獣界、狼界があるんだ」

きかい、ろうかいあたりが、漢字にどう変換するのかわからなかった。

先輩に教えてもらい、納得。……ああ、鬼と狼かあー。

でも、これは初耳。何か、超ファンタジックで一見信じ難いんだけど、先輩は、嘘とつかなさうだし。

「最近、前代の神様が寿命で亡くなられて、しばらく神無し状態が続いたんだ」

うわ。十月みたい。ていうか、やばくない？

「やばかったんだよ。神様がいなくなっただけで、森羅万象がぜんぶ崩れて、異常気象やらいろいろな大変だったんだがまあ最近おさまりつつある。だが、おさまったと同時に、死んで成仏???天界で、

魂が天国と地獄に処理されることだな。その処理が、神様がいなくなった途端にめちゃくちゃになったんだ。その神様は、ちょうど四代目で、一から三代目まではそんなことはなかったのに、急にな……やばいでしょ、魂の処理がめちゃくちゃになるって、想像できないもん。

「で、天界の扉から、魂が下界??位置上の下側って意味じゃなくて、天界以外の世界ってことなんだが??に大量にこぼれることが勃発しているんだ」

や……やばすぎでしょ!

「さらに、神様の血筋を引いている巫女があとわずか四人しかいないくてだな、もう男の子??要するに神様を誰かが生まないとやばいんだ」

よ、四人!?

「それに、昔は魂が落ちるのがレミナリ王国だけだったんだが、だんだん範囲が広がってきて、で、最近は人間界に広がりつつある。天界の扉に位置上、一番近い人間界の東京都にたくさん落ちるようになったんだ。横浜とか、千葉にもな」

何か、すごい偶然だね、東京都。

「で、美琴の言っている通り何という偶然か、天界の扉に一番近いのが、東京都の??この学院だったんだ」

え?????っ!!!! まさに、運命じゃん。

「で、いま、魂がこの学院に落ちているわけだ。ちなみに、この魂が落ちたままになるとだな。魂ってものはすごくてだな、この世界の時空がわずかにゆがんでしまう」

思わず、背筋がぞくつとした。

どうなるの、それ……。

「だからだ。落ちた魂をそのままにしていたらダメなんだ。狩らなきゃいけない。そこで、美琴に協力してほしい。冒険者ギルド、魂狩り部隊に入って、今回のこの学院に落ちた魂を狩るのに協力してほしいんだ」

…

「お願いだ。一応言っておくが、人間でもできるからな」
先輩は乞うようにこちらを向いた。

No. 003 神様がお亡くなりになったら幸いです（後書き）

今回は異様に疲れた〜！

果たして美琴は協力するのでしょうか！？

……まあ、協力しなかったらこの先どう物語を進めていいのやら……。

N o. 004 魂狩りは思いのほか難しいようです(前書き)

とうとう来るか、名前呼び捨て!?

No. 004 魂狩りは思いのほか難しいようです

No. 004 魂狩りは思いのほか難しいようです

「??協力するよ」

時空がゆがんじゃうなんて、そんなの聞いたら、ほっとけないもん。

私がそう言った途端、先輩はうなづく。

「そう言うと思ったよ、じゃ、行こう。これから俺のことは、先輩じゃなく綾りょうと呼べ」

え! とうとう下の名前呼び捨て、来た! ていうか、漢字で書いたら女子の名前みたいなんだけど。

「……俺は、このアヤっていう字、気に入ってるんだけどな。」

それはともかく??これは生徒会長からの命令………というよりも、魂狩り部隊の先輩からの命令だからな。綾でいいから」

「……わかった」

生徒会長から、部隊の先輩からの命令なら。そこまで言うのなら。……がんばってみるけど。

「ついてきてくれ」

そう言って、せん……綾は革張りソファから立ち上がる。私もあわてて後を追う。

「魂狩りの方法を教えておく」

うん。それは聞いとかないと。

魂狩りって、ぷかぷか浮いてる人魂を網で取っ捕まえて袋に入れる、……じゃないよね。

「全然違うぞ。俺たちの目で見える魂ってゆーのはだな、金平糖なんだ」

……コンペイトウ?

「金平糖の形をしている、と言ったほうが正しい。なめたりすんな

よ？」

わ、わかってるよ。

「少し大きい金平糖だな。で、今までは美琴にわかりやすいよう魂と呼んでいたが、本当は、俺らは魂のことを金平糖と呼んでいるんだ」

ほほー。あ、何か食べたくなってきたよ。

「食べるな！……で、だな。その金平糖は、……これで探すんだ」と言いつつ綾がとりだしたのは……何それ。

ちょうど私の瞳の色と同じ、鈍く光る銀色の、平たいカードみたいなもの。

私の瞳の色は、鈍く光る銀色。で、不思議なことに、たまーにだけど、ほんとにたまーに、左目が鮮やかな紅色になるんだけどね。何かの病気かしらってお母さんが心配してたけど。

「……く……紅色になる……!？」

突然、綾の声が詰まる。

「え……何？」

私は綾の顔をうかがう。何か悪いこと言ったかな。

「紅の京……俺と同じか」

え、何よ。綾と同じ？

「……? ? いや……何でもない。それより、これはレーダーだ」

ああ、レーダーか！……って、それってレーダーなの？ カードみたいなんだけど。

「レーダーだよ。このボタン押すと、ほら、立ち上がるから」

「ボタンって、それ？ あ……ほんとだ」

薄いカードなのに、右上にボタンがあった。視力検査の”上”に棒を真ん中まで突きさした電源ボタンのマークだ。このマークって万国共通なの？ レミナリ王国とか、○界とか。ああ、レミナリ王国は異界の一部だったけ。

機械音ひとつせず、カードの中に長方形の液晶が青白く点灯。す、すごい薄い液晶……。

「だろ？ 俺も初めて見たときはびっくりしたよ」

カードの液晶が、何やら直線とわずかに曲線が混じった設計図みたいなものを映し出す。

「この学院を上から見た図だよ」

ああ……言われてみれば、確かに。西館と新館、カフェテリアにグラウンド、体育館、ホールと見覚えのある位置関係だ。

「お、俺らのそばに、金平糖、落ちてるぞ」
ほんと？

「ああ」

綾は液晶を二本指でピンチする。するとマップは拡大され、ピコピコと明滅する？ たぶん現在地のすぐそばに、ギザギザした怪獣みたいなマークがいくつかあった。これが金平糖か。

私が妙に感心していると、綾が突然叫ぶ。

「……お前、足下っ」

……え？

No. 004 魂狩りは思いのほか難しいようです（後書き）

いやゝ

今回割と短めな理由は、中断しなければならなかったからなので、ストックがなくなっただかそーゆーわけではありません。すぐ更新しまーす

N o. 005 金平糖は素直じゃないんです(前書き)

さあとうとう魂???金平糖の登場ですよ！

No. 005 金平糖は素直じゃないんです

No. 005 金平糖は素直じゃないんです

あ、足下!?

私はあわてて数メートルほど後ろに飛び退く。

そんな私を見て、綾は驚いた様子で一言。

「ハンパねえ跳躍力だな……」

ん。ま、頑張れば靴はいても七メートルくらい跳べるんじゃない? ……さすがに七メートルは無理か。いや、でも意外にけるかも。

「……で、だな。これが、魂??金平糖だ」

私はさっきまで自分のいたところには……わ、これが魂かあ……!まさに金平糖そっくりだった。ほとんど同じだった。違いは……強いて言えば、金平糖より一回り大きいといったところか。色はオレンジ色だった。わずかに、明滅しているようにも見える。

綾はカードの電源を切って制服の上着のポケットに突っ込みつつ、解説してくれる。

「色はいろいろ違うんだ。赤、オレンジ、黄、緑、紫、黒、青、水色、白……何色でもある。たまに、……魂のことをレアって言うのも何だが、レアもので虹色の金平糖もあるんだ」

虹色? い、一体、生きてたときにどんな行いしたら、虹色なんかになるのよ?

私は思わず心の中でそう叫んだ。でも綾はスルーして少し表情を硬くする。

「ここから狩りに入るんだが??金平糖は、場合によってはすんなり拾えないときもある。というか、大半の金平糖はそんな簡単には拾えない。少しでも心の内に悪があったら、戦わなきゃいけない」

金平糖がすんなり拾えないって、金平糖と戦うって、二つとも、

一体どういうことなのか気になるんだけど。

「気になるか？」

「すく」

私が即座に答えると、綾はふつと笑う。

「じゃ、今からそれを見せてやるよ。」

もしすんなり拾えない場合??少しいつもの俺と違う風になるから、驚くなよ」

そんなこと言われると、怖いんですけど……。

「すんなり拾えるといいんだが……」

そう言いつつ、綾は腰をかがめて金平糖に手を伸ばす。

綾の指先が、まさに金平糖に触れたその瞬間！

バリイインツ！！！！！！！！

金平糖が青白く発光したかと思うと、金平糖を中心に稲妻が走った。

りよ、綾、感電しないの！？

変に心配しながら私は眩しきで目を閉じたのか、そこから先は見えなかった。

目を開けると……綾と対峙しているのは、金平糖でもなく、人魂でもなく……真っ黒な影法師だった。



「いいか美琴、これが金平糖だ。心の中に少しでも悪があると、こ
う真つ黒な影法師になる」

綾は、私が心の中で想像した金平糖の描写をパクったかのようにそう言った。

「パクってなんかねえよ。で、この影法師なんだが、これはあくまで金平糖を実体化しただけのもので、これが消滅しても魂が消滅するわけではないから安心しろよ。この影法師を倒すと、影法師はこの金平糖の中に戻っていくから。そしたら、金平糖は普通に拾える」

魂狩りって、思ってたより大変かも。

倒さなきゃいけないって、いくら綾が言ってるようにあくまでただ実体化しただけといえど、金平糖は魂だし、魂をそんな攻撃していいのかとめっちゃくちゃ不安なんだけど。

「いいか。魂狩りに、かわいそうとか、罰当たりとか、そんな情は不要だ。一応天界の神様の秘書的存在に許可は取ってあるんだ」
神様の秘書って……初耳なんだけど。



「で、今から、俺がこいつを倒す。もし俺が応戦を頼んだら、一緒に協力してくれよ。」

「……ああ、事前に言っておくが、剣とか刀、棒とかの武器は効果がないからな。生身……生きている者以外の攻撃は、影法師をすり抜ける」

「わかった！」

何か、戦うのは結構久しぶりだから、ちょっと楽しみ。すぐに応戦できるように、全身をほぐしておく。

今まで綾が私に説明してた時間、よく何もしてこずに待ってたなあと思った。

……けどこの影法師は、別に警戒はしているものの、攻撃してこようとはしていない。そんなに敵意はないのかもしれない。

私がそんなことを考えている間に、早速綾が、地面を蹴って影法師へと向かう。

影法師はこちらを見やって、さっと身構える。

綾は一気に間合いをつめると、序盤からさっそくフェイント気味で攻撃を繰り返す。

何発か、フェイントを交えた攻撃は影法師に命中。でも、一目見て、ダメージを受けているのかどうかはよくわからない。……影、だからね。

綾は何発かパンチを繰り出した後、前蹴りを出した右足を軸にぐつと体をひねって、勢いで左足の後ろ回し蹴りを影法師に炸裂！
影法師は数メートルほど吹っ飛んだ。

「ふう……今回の影法師、異様にタフだな」

綾はあれだけ動き回ったのに、息一つ切らしていない。まあ私から見ると当然のように思えるんだけど、ここは結構やるじゃん、つてことにしておこう。



「ふうー……っ……今回の金平糖は手強いな」

綾はその後も攻撃を続けたんだけど、なかなか影法師は倒れてくれない。それよりも、影法師は最初は攻撃をしてこなかったんだけど、中盤からは急に攻撃してくるようになった。一つ一つの攻撃は当たってもダメージは軽いんだけど、そのぶん超素早い。何発かが綾に当たる。綾は大してダメージ受けてないけど。

「応戦……する？」

「いや、まだいいよ。そんな疲れてないし。息が切れてきたら、頼む」

「オッケー」

私は軽くうなづく。

「ていうかさ、綾のえーと確か祖父とか言ってたよね。異世界出身なんだったら、綾も、魔術とか使えるんじゃないの？」

私は何の気無しに聞いてみた。

「あー……使えることには使える」

「え、じゃあやればいいじゃん。……あ！ 生身の人間の直接攻撃じゃないとダメだったんだっけ」

先ほどの綾の言葉を思い出した私は、自分のうかつさに頭を抱えかける。が、

「いや。術は例外だ。唱えた者が生身の人間であればちゃんと効く。

効くんだが??」

「何よ。何でそんなに悩んでるの?」

私は不思議だった。使えるんだったら、使っちゃえばいいのに。

「いや……あのなあ美琴。ここがどこかわかってんのか?」

え? ??あ。

「ああっ……綾……私死にたい……」

「いや、別に俺は、お前を責めるために言った訳じゃ」

そんなことを言いながらも、綾は攻撃を交わしているのだ。意外にやるねえ。

「意外にとはなんだ」

綾は憤慨そうに眉をひそめる。

「うー……でも、小さい魔術ならバレないんじゃないの」

「まあそうなんだが。」

でも、もし俺が魔術使える超能力者に近い存在だってことがバレたら、先祖が異世界出身とかバレたら、俺が冒険者ギルドなんかに属してるのがバレたらダメなんだ。

いくら魂狩りのためとは言え、学院生活に支障が出ると、いろいろとまずい」

それから、綾はなぜかニヒルに笑い、

「??一応生徒会長だしな」

生徒会長、を強調して言った綾は、自信ありげに笑った。??攻撃を繰り返しつつかわしながら。

何だ、思ったより全然出来るんじゃない。

思わず、私の口から笑みがこぼれる。

No. 005 金平糖は素直じゃないんです（後書き）

何か、美琴と綾、いい感じじゃないですか！？

もしこのまま恋（！）をすると、美琴には悪いですが、色々と困ることがあるのではないかと作者は思います。

まず、美琴は上級生相手にタメ口でしゃべっている。そして綾とかなり親密である。そして綾は全校生（女子）にモテモテである。そして美琴と綾はさっきも言ったが親密で、傍（はた）から見たらカップルに見えなくもない。？？全校生女子の妬（ねた）み・嫉妬（はた）をかうことになる。うわゝ……美琴の身に危機が！

まあ、美琴なら平気で退けると思いますが。一応応援しておくってことで。

N o. 006 魔方陣はこんな使い方ができるのであった(前書き)

ちょっと、ここから先どう物語を繋げていけばいいのか……

No. 006 魔方阵はこんな使い方ができるのであった

No. 006 魔方阵はこんな使い方ができるのであった

「はあっ……はあっ、はあっ、はあっ……」

綾は、何度も激しい攻撃を繰り返して、息を荒くしている。影法師は、全くダメージを受けていない。??ように見える。

「応戦、したほうが……いいんじゃないのっ?」

私は思わず裏返った声で聞く。

「いや……魔法、そろそろ……やるか」

「えっ?」

そう言っ、綾は空に手をかざす。

ブウン、と奇妙な音がして、……魔方阵、とかいうものが現れる。

「奥の手だからな」

私にそう笑って言いつつ、手を動かす。

綾の手の動きと同じように魔方阵が宙を舞う。綾は金平糖??影

法師に手をかざす。魔方阵がその上に重なった。

「最初は……」

N o. 006 魔方陣はこんな使い方ができるのであった（後書き）

今回はかなり文字数少なめです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6604y/>

たましい系学院（園?）物語

2012年1月10日01時46分発行